

「大阪芸術大学図書館所蔵のヴィクトリア朝時代の挿絵本と 絵入り芸術雑誌の調査研究」

研究年度・期間：平成6年度～平成8年度

平成6年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨
(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨
(美術学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
山崎 冬子
(文芸学科 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 助教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
笹谷 純雄
(文芸学科 講師)
水島ヒロミ
(文芸学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
研究補助者：東野 真紀
(大学院 副手)
山口 真理
(大学院 副手)

平成7年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨
(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨
(美術学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
山崎 冬子
(文芸学科 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 助教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
笹谷 純雄
(文芸学科 講師)
水島ヒロミ
(文芸学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
田之頭一知
(大学院 助手)
研究助言者：多田 稔
(大谷大学 文学部 教授)

平成8年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨
(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨
(美術学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
山崎 冬子
(文芸学科 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 助教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
水島ヒロミ
(文芸学科 助教授)
笹谷 純雄
(文芸学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
田之頭一知
(大学院 助手)
研究助言者：多田 稔
(大谷大学 文学部 教授)

研究経過の概要

前世紀英国のヴィクトリア朝時代には、多様で秀逸な挿絵本や絵入り芸術雑誌がつぎつぎと現れ、近代的な視覚伝達文化の推進力のひとつとなった。そして今日では、これらの書物や雑誌合本は、ヴィクトリア朝時代の芸術文化の総合的な研究にとって欠かすことのできない貴重な史料となっている。幸い本学図書館には、書物芸術再興の口火を切ったケルムスコット・プレス(Kelmscott Press, 1891 - 1898)刊本、アール・ヌーヴォーの先駆けをなしたオーブリ・ピアズリー(Aubrey Beardsley, 1872 - 98)やウォルター・クレイン(Walter Crane, 1845 - 1915)の挿絵入り本、最も権威のあった総合芸術誌のひとつ『アート・ジャーナル(Art

Journal, 1839 - 1912)』、当代の大衆文化の息吹を今に伝える絵入週刊誌『パンチ (Punch, 1841 - 1992)』、そして万国博覧会の図録集など、ヴィクトリア朝時代の挿絵本と芸術雑誌の代表的なもののいくつかが収集され所蔵されている。そこで、本研究は、本学の美術史・工芸史・建築史の専門研究者たちが定期的に集まり、当資料を総合的に調査し、また本研究に関連する基本的な図書資料を収集した。

最終年次は、これまでの研究成果を基にして、本研究の対象となった図書資料の特別展を『ヴィクトリア朝挿絵本とウィリアム・モリス』(1996年11月6日 - 10日、大阪芸術大学情報センター・展示ホール)と題して大阪芸術大学図書館と協同で企画し開催した。またこの展覧会カタログに、本研究に関する図書資料の書誌および研究成果を集成した。

研究成果について

本研究は、3年間にわたっており、当研究に必要な図書資料を購入し、定期的に研究会を持つとともに、大阪芸術大学図書館と協同して、本調査研究の対象となった図書資料を、元エマリー・ウォーカー所蔵『ケルムスコット・ハウス写真集』をも含めて特別展観した。またその展覧会カタログを制作し、本研究に関する図書資料の書誌および研究成果を集成し公表した。

その結果、本学所蔵のヴィクトリア朝時代の絵入芸術雑誌や挿絵本は、近代的芸術文化の実相を知る上で貴重な研究史料であることを確認した。すなわち、十九世紀中葉の英国では、近代的な視覚伝達文化の幕開けを告げるかのように、『アート・ジャーナル』や『パンチ』など多彩な絵入り雑誌が相次いで創刊されている。またこうした絵入り雑誌の発達を大いに刺激したのは、第一回ロンドン万国博覧会(1851年)の時に刊行された各種の『万国博覧会図録』であり、これらは当代の産業美術のデザイン動向を今に生き生きと伝えている。その一方では、一群の秀逸な挿絵本が相次いで現れている。その口火を切ったのはモクソン版『テニス詩集』であり、これにはラファエル前派運動の指導的な画家たちの挿絵作品が収録されている。彼らの魅力的な作品群はヴィクトリア朝の挿絵芸術に新風を吹き込んだのである。またラファエル前派の画家たちと交流のあったウィリアム・モリスは、晩年に自ら私書版印刷所ケルムスコット・プレスを設立し、書物芸術の再興に立ち上がっている。

本研究は、これら図書史料を比較研究することによってヴィクトリア朝時代の視覚伝達文化についての総合的研究を推進し、近代的な視覚伝達文化の生い立ちと書物芸術の再興の相関関係を明らかにした。

研究の反省

美しい書物再興へのモリスの熱意と優れた成果に誘われるかのように、世紀末には絵入り雑誌やプライベート・プレスの黄金時代が到来している。モリスのケルムスコット・プレスから直接に影響を受けたバーミンガムの『クエスト(1894 - 96)』、アール・ヌーヴォーの鬼オビアズリーが挿絵画家・装丁家として活躍した『イエロー・ブック(1894 - 97)』や『サヴォイ

(1896)』、さらにはドイツにおけるユーゲントシュティールの温床ともなった愛書家者向けの総合芸術雑誌『パン(1895 - 1900)』など、多彩で華やかな雑誌が相次いで発行されている。こうした多彩なヴィクトリア朝時代における挿絵入り本や絵入芸術雑誌を取り巻く芸術的社会的な特殊性や、その今日的な意味について、共同研究者が共通の理解を得て、資料を調査研究を進めるには予想以上の調整作業を要した。しかも、今回の調査対象となっている史料はヴィクトリア朝時代(1837 - 1901)の全体を貫いており、これら資料の量に圧倒されがちであった。したがって個別的な資料のさらに精細な調査研究については今後とも継続して行きたい。